

オゴルマン 『アメリカの発明』と現在

青木芳夫

(一) はじめに——著者略歴——

本稿で取り上げる『アメリカの発明』⁽¹⁾は、著者オゴルマンが米国のブルームントン市のインディアナ大学において行なった連続講演を一書にまとめ、同大学出版局から一九六一年に刊行されたものである。直訳すれば『アメリカの発明——新世界の歴史的性質およびその歴史の意味に関する研究——』となる。のちに一九七七年、メキシコからスペイン語版が著者の手により刊行され、八〇年代・九〇年代と版を重ね、すでに古典の域に達している。

オゴルマンは、一九〇六年メキシコ生まれのイギリス系メキシコ人である。そのことが、エルネスト・デ・ラ・トーレによれば、メキシコに対する深い愛情とともに、イギリス的な沈着さと厳格さ、そしてウィットを兼ね備えさ

せることもなったという⁽²⁾。

青年オゴルマンは、最初法学を学び、一九二八年には弁護士資格を取得した。また、修道志願者として長い日々を送っていたが、歴史学への思いを断ちがたく、ホセ・ガオスに師事するとともに、メキシコ国立文書館において古文書研究に専念することとなった。のち、メキシコ国立自治大学の哲文学部やイペロアメリカ大学において教鞭をとり、若い世代の歴史研究者の育成にも貢献した。

一九九二年の「二つの世界の出会い五〇〇周年記念 (Centenario del Encuentro de Dos Mundos)」を目前に控えた一九九〇年にメキシコ国立自治大学書誌研究所が「メキシコ国立図書館におけるコロンブス」と題して展覧会を開催するが、これには長年にわたるオゴルマンの一九九二年研究に報いるという意味があった。当時オゴルマンは、

メキシコ歴史学会会長でもあった。

さて、一九九二年は、コロンブスによる、いわゆるアメリカ「発見」から五〇〇年目に当たり、日本においてもさまざまな記念事業や記念出版が行なわれたが、例えばサンタ・マリア号の復元・航海ならびに保存に象徴されるように、いまなおヨーロッパ人による冒険物語的な理解が根強い。これに対し、同書はいわゆる「コロンブスによる発見」史観を否定し、ヨーロッパ全史、さらにはアメリカ全史の中に一四九二年の意義を位置づけようとしている。そういう意味において、同書の内容を紹介し、さらなる問いかけをしていくことは有意義であろう。

(一) 同書内容紹介

最初に、同書の構成に従って、その内容を紹介していく。
I アメリカ発見史観の歴史と批判

著者オゴルマンが批判しようとするアメリカ発見史観とは、「一四九二年のある晴れた日にアメリカはコロンブスにより発見された」とする考え方であった。そしてこのようなアメリカ発見史観は、論理的には三つの段階あるいは

過程に分類することができる。

第一段階は、「コロンブスによる意図的な発見」とする見方で、その代表例がオビエド『インディアス自然全史』⁽³⁾（原著一五三五年刊）である。

しかしながら、このような考え方は、例えばナバレテ『航海発見集』⁽⁵⁾（原著一八二五—三七年刊）によりコロンブス史料が刊行されるようになると、コロンブスの意図が西航によるアジア到達であったことは否定しようもなくなった。

第二段階は、個人の意図を超えた意図、つまり「超意図」による発見とする考え方であり、それによればコロンブスは一種の道具にすぎなかったことになる。古くは、超意図をキリスト教における神に求めようとしたラス・カサスの⁽⁶⁾コロンブス観もこれに当たるが、もつとも代表的な例はドイツの博物学者フンボルト⁽⁷⁾であり、彼は『宇宙』（原著一八四五—六二年刊）において神の代わりに「歴史」に、より正確には「歴史の進歩」に、超意図を求めようとした。しかしながら、このような考え方も、フンボルトとほぼ同時代に歴史研究の方法論を確立したランケの実証主義史学、つまり歴史は「現実におきた」ことを叙述すべきであ

るとする考え方の前に否定されざるをえなくなる。個人の意図、つまりコロンプスの場合アジア到達が彼の意図であつたことこそ、重視すべきであるとされた。

その結果、「偶然による発見」という考え方がアメリカ発見史観の第三段階ということになった。その代表例が、いまなおコロンプス研究の基本書とされるモリソンの『海洋の提督』⁽⁸⁾（原著一九四二年刊）である。この「偶然による発見」という考え方を批判し、自説、つまり発見史観の第四段階に相当し、アメリカはヨーロッパ人により発見されたという考え方を展開するために、オゴルマンは、以下のような概念規定を行なう。なお、この発明過程は、一四九二年に開始され、一五〇七年には終了するとされる。つまり、「発見」(discover) するためには「遭遇」(find) したものの本質をあらかじめ知つてゐることが必要であり、そうでない場合は「発明」(invention) に相当し、したがつて概念そのものが着想される。一言で表現すれば、発明とは命名することである。また、発明に類似した概念に「創造」があるが、創造とは無から有を生み出すことであり、学問の領域というよりもむしろ宗教の領域に属するものであるとして、放棄される。

そして、ある行為を「解釈」することは、その行為に特定の意図、特殊な存在を付与することを意味するが、ただし、形・数・ものなどの非生命体は、そのような「意図」を持ちえない。したがつて、第三段階の「偶然による発見」という考え方は、客体であるアメリカ大陸という非生命体に意図を持たせようとするものであり、論理的に不条理であるとして、否定される。特にモリソンの場合は「形而上学的強姦」(metaphysical rape) に相当するとして批判される。

Ⅱ 文化的地平

オゴルマンは、アメリカは発見されたのではなく発明されたという自説を展開する前に、一五世紀末当時のヨーロッパ人が抱いていた宇宙観を紹介する。

当時、次の二点が争点となつていた。

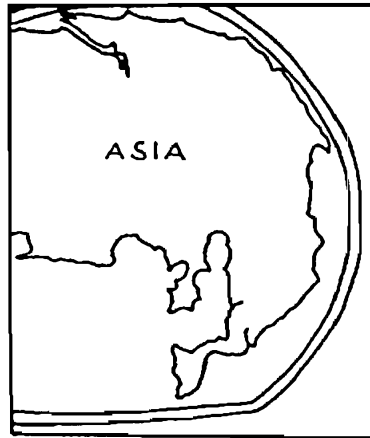
第一の争点は、陸地(陸球)の占める割合、つまり地球の大きさをめぐつてであり、中世初期にはエスドラス書(エズラ記)に準拠して陸球は地球の大半、正確には七分の六を占めるとするもので、この考え方によれば西方航路のほうが有利となる。コロンプスもまた、この説を支持していた。一方、中世も半ばをすぎると、イスラム世界を介して

アリストテレス・テーゼが復活するようになる。これによれば、陸球は四分の一を占めるにすぎない。一五世紀末までには後者の考え方のほうが優勢になっており、したがって、当時海洋航路開発に一步先んじていたポルトガルは東方航路によりアジアに到達しようとしていた。後発国スペインとしては、西方航路によるアジア到達という、一種の賭けに出たことになる。

第二の争点は、陸球の極東岸の形状をめぐることであり、これには一半島||黄金半島(現マレー半島)説と追加的半島説||二半島説という二つの考え方があった〔資料①〕。後述するように、コロンブスの場合、第三回航海までは前者の考え方に立っていたが、第四回航海以後は後者の二半島説を支持するようになる。なお、当時のヨーロッパでもっとも信頼されていたのは、マルコ・ポーロの記述であり、それによれば、極東岸は、北極地方から南回帰線まで南北に走っていた。したがって、西方航路をとれば、インド洋への海の回廊を発見することが立証のための不可欠な条件になっていた。

これらの争点を別にすれば、一五世紀末のヨーロッパにおいて支配的であった古典ギリシャ的宇宙観とキリスト教

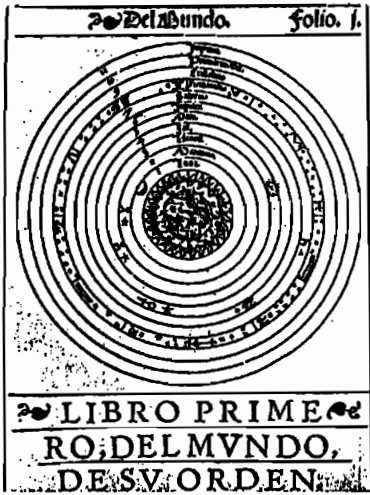
資料① 1半島説と2半島説——西語版オゴルマン図版Ⅲa/b——



<左>ジェノヴァ人某の世界図(1457年)

<右>ヘンリクス・マルテルス・ゲルマヌスの世界図(1489-92年)

資料② 地球中心の宇宙体系図——オゴルマン図版Ⅰ——



ペドロ・デ・メディーナ (1545年) より
地球を中心に、月・水星・金星・太陽の順に並んでいる

の宇宙観という二つの宇宙観には、以下のような共通点があったとされる。

まず、「宇宙」は神により無から創造された。したがって、宇宙は有限かつ完全にして、変更することは不可能であった。また、宇宙は人間でなく神に帰属していた。これを視覚的に表現したのがペドロ・デ・メディーナの著作に収録された地球中心の宇宙体系であり〔資料②〕、これによれば天球が完全であるのに対し、地球は元素ゾーンは不完全なため腐敗する。

資料③ 島としての陸球——オゴルマン図版Ⅱ——



マクロビウスの世界図 (1483年)
対蹠地を除けば、陸球は圧倒的に海に囲まれている

次に、「陸球」(Orbis Terrarum) は例外的な、したがって不安定な存在とみなされていた。その結果、陸球は島 (Island of the Earth) のように図示された〔資料③〕。

そして、陸球に対する「対蹠地」の有無については懐疑的であったが、その対蹠地に人間が居住している可能性については、例えば『神の国』の著者アウグスティヌスの意見のように、まったく否定的であった。

そして「世界」(World)については、宇宙における人間の居住場所ないし家庭として付与された空間とみなされており、古典ギリシヤ期のオイコウメネ(エクメネー、居住域)という考え方に近かった。しかし、古典ギリシヤ的「世界」観〔資料④〕は陸球、特に極地や炎熱圏を除く北の温帯圏を指すだけで、非常に静態的な考え方であったのに対し、キリスト教的「世界」観の場合、地上の楽園からの追放を契機として歴史的人間が誕生し、彼ら、地に墮ちた人間が拡散していくことにより、「世界」は陸球の物理的境界まで拡散するようになることされる〔資料⑤〕。ここには、世界は人間自身が造るものという概念の萌芽が認められ、古典ギリシヤ的世界観と比較すれば、より動態的ではあったが、当時はアルベルトゥス・マグヌス、ロジャー・ベーコンに代表されるような神学的精神、つまり教父的世界観が優勢であったために、イシドルス(イシドール)のように南方の対蹠地を認めた多元的世界観は例外的であり、その全面的な開花は近代を待たねばならなかった。

一方、陸球に対する「海洋」は、「世界」の限界を画し、したがって人間にとっては外来的で異質なものにすぎず、そのため政治面でも法的領有の埒外に置かれてきた。

資料⑤ 中近世キリスト教的世界観
— ルターの聖書の彩色木版画(1543年) —



出典：G・バラクラフ編、上智大学中世思想研究所訳『図説キリスト教文化史』Ⅱ(原書房、1993年)

資料④ 古典ギリシヤ的世界観
— 中世のクリマ図(1500年頃) —



出典：チャールズ・ブリッカー、矢守一彦訳『世界古地図』(日本ブリタニカ、1981年)

その結果「人間」は、宇宙の住人、つまり人間自身のための宇宙の家の住人というよりも、囚人、神の小作人あるいは農奴としてしか自己を意識することができず、そのため無能感や拘束感に囚われていた。その言語的表現が、もともと「貸家」を意味していた *insula* が「島」を意味するようになり、ひいては人間の住みかである陸球が島のように小さく図示されるようになったのである。

Ⅲ アメリカ発明の過程

オゴルマンは自説の「アメリカ発明の過程」、つまりアメリカ発明史観を展開するために、「實在論」的考察を批判し、「存在論」的考察に訴える。彼によれば、この発明過程は一四九二年のコロンブスによる第一回航海に始まり、アメリカゴ・ベスブッチによる第三回航海を経て一五〇七年の『宇宙誌入門』と同書所収のヴァルトゼーミュラーの世界図「資料⑥」によりほぼ終了する。さらに付け加えるならば、最終的には一五四三年のコペルニクスの地動説をもって完成する、と推論することができる。

以下、オゴルマンは、コロンブス「資料⑦」やアメリカゴ「資料⑧」の船に同乗しながら「アメリカ発明の過程」を説明していく。

資料⑥ ヴァルトゼーミュラーの世界図
— 西暦版オゴルマン図版A b —

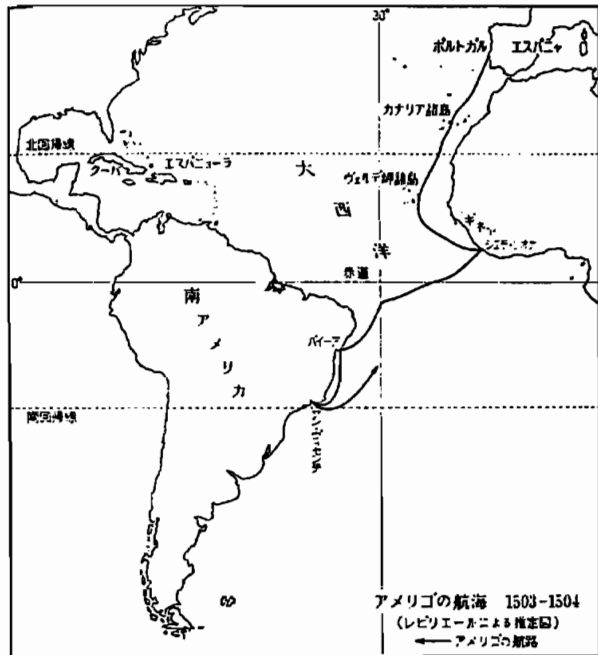
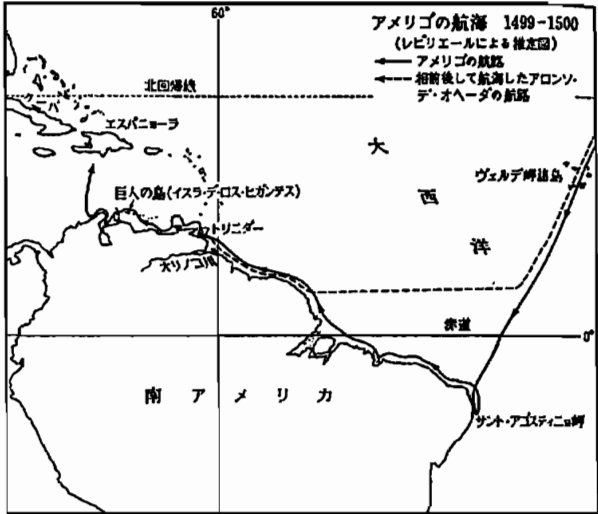


世界の第4の部分としてのアメリカ

結論を先取りしていえば、コロンブスは「コロンブスの卵」の逸話では創意工夫の人というイメージが強いが、彼によれば、実際には彼こそ中世的宇宙観に最後まで執着しつづけた人であり、常に自らの先験的仮説に執着し、それが信念と化してしまうほどであった。したがって、コロンブスの意見ではなく、彼の主張に疑念を抱いた人々の意見こそ傾聴に値したのである。

具体的には、一四九二年の第一回航海では、人間が居住しているという事実のみから、コロンブスは自分がアジア

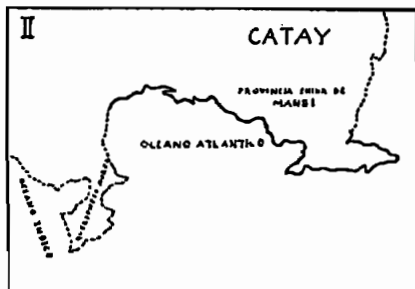
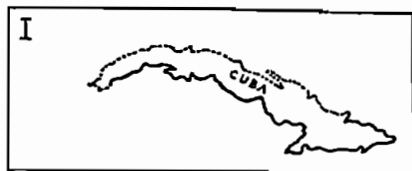
資料⑨ アメリゴの第2回および第3回航海



出典：前掲『航海の記録』

に到達したものと判断した。なぜなら、中世的世界観からすれば人間は陸球にしか居住できないはずだからであった。これに対して、例えばピエトロ・マルティネリ^⑧(ペドロ・マルティール)は、それが「西方の対蹠地」、「新しい半球」^⑨、あるいは「新しい球」かもしれない、と思いを馳せた。そして一四九三年からの第二回航海ではコロンブスは

キューバ南岸を探索するが、これを中国マンジ地方の南岸に比定しようとした〔資料⑨〕。これに対しても、例えば同じピエトロ・マルティネリの意見は、新発見の土地キューバは島であるとするものであった。また、コロンブスに同行したクネーオは、キューバはアジアの一部ではなく、島である、という印象を強くした。

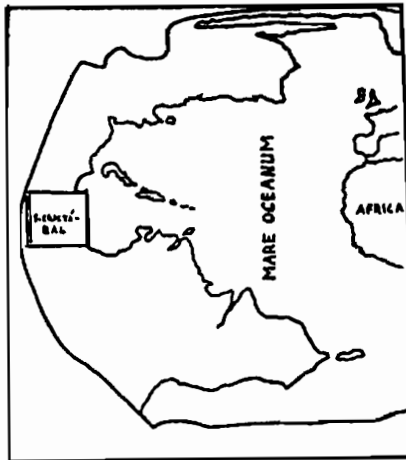


左図の実線部分がコロンブスが踏査したところで、彼はそれを右図のカタイ地方の実線部分と誤解した。

さらに一四九八年からの第三回航海では、コロンブスは南米北岸の、現在のパリア湾（ベネズエラ）に到達する。この湾には淡水が含まれていたためにコロンブスを困惑させることになるが、ここでコロンブスは自分は「地上の楽園」に到達したのかもしれないと考えるようになる。つまり「パリア」は「新世界（New world）」であり、その規模は陸球に匹敵し、そこには人間が居住し、地上の楽園を含む「南の球」である、とした。しかし、コロンブスはこの時点になってもキューバをアジアと比定しており、むしろこの先験的仮説を守るためにパリアを陸球とは別の新世界と解釈しようとした。また、人間が居住していた事実については、他でもない、人間の始祖の地「地上の楽園」であるとパリアを解釈することにより、逆に、人間は陸球にしか居住できないという先入観を救おうとしたのである。つまりコロンブスの場合、先験的仮説を救い、精神的統一性を維持するための新世界説であった。

コロンブスの第三回航海と前後して行なわれた諸航海により、しだいに「南の本土」、つまり対地球ないし対蹠地の存在が知られるようになり、争点は北の本土と南の本土が連続しているのか、それとも連続していないのか、とい

資料⑩ コーサの世界図 (1500年)
— 西語版オゴルマン図版Vb —



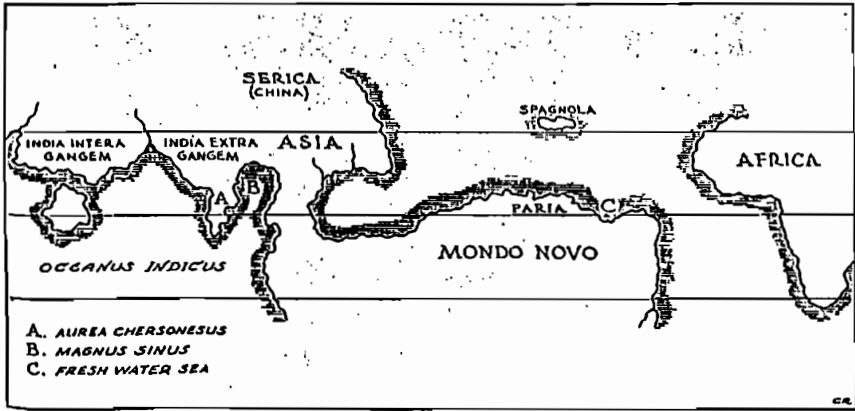
南北が連続しているのか不連続なのか、中央に聖クリストバルの像を配置

う点に移っていった。それを立証するために、インド洋に通じる例の「海の回廊」が精力的に探索された。この時期の人々のためらいは、一五〇〇年のコーサの世界図〔資料⑩〕の中に端的に表現されている。

コロンブスは一五〇二年から最後の第四回航海に出発した。しかし、南北間の海の回廊を発見できなかったために、それまで抱いていた一半島説から二半島説に転換し、それによりキューバはやはりアジアであるという結論を確認しただけであった〔資料⑩〕。

これに対し、アメリカは一五〇一年からの第三回航海で南北沿岸をパタゴニア地方まで南下し、その結果それまで抱いていた二半島説から一半島説へと転換し、新発見の土地は陸球から地理的に独立しているという結論に到達する。彼は一五〇三年に発表した『新世界』において、①誰も知らなかったこと、②南半球は海だと思われていたこと、そして③人間が居住していることから、従来異教的とされてきた多元的世界観を受け入れ、南北の本土は分離されているという、第三回航海後のコロンブスの見解と類似した結論に到達した。しかし、両者の姿勢は似て非なるものであった。なぜなら、コロンブスが先験的仮説を救おうとしたのに対し、アメリカは後験的仮説に基づき新世界説を唱えたからである。

さらに、アメリカは、一五〇四年に『四度の航海 (Lettera)』を発表する。同書では、「新世界」という呼



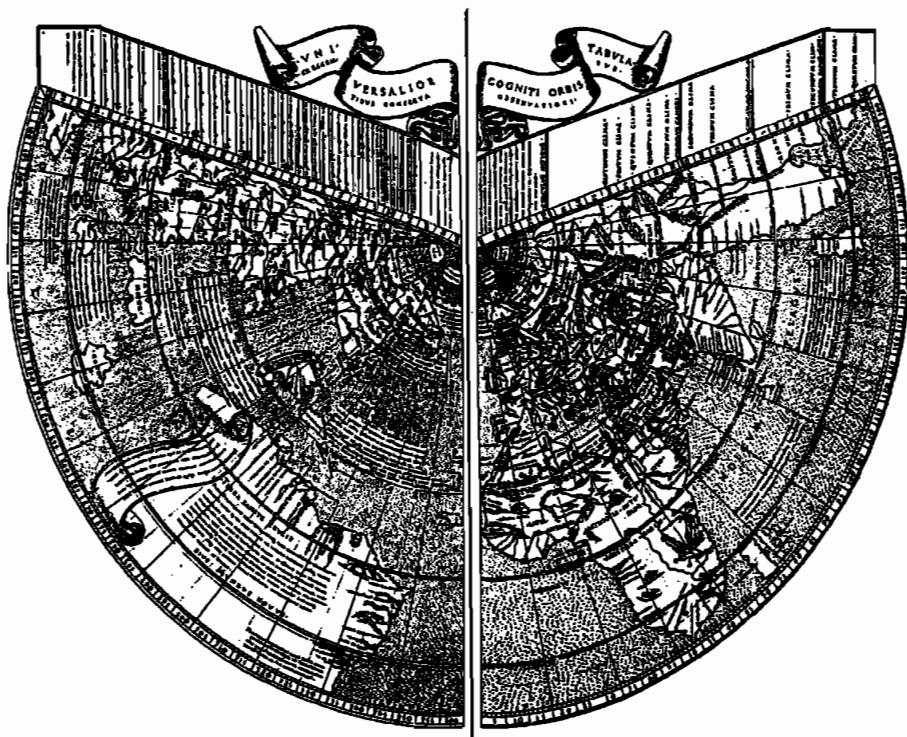
三つの概略地図を合成したもの (1503-06年頃)

称を使用しつづけることに躊躇している。なぜなら、以前に航海した北の地方にも、つまりコロンプスを含めて「陸球」の一部とみなされてきた北の部分についても南の本土と同じことがいえるのではないか、という着想が芽生えたからである。結局アメリカは、世界 (the world) の一部である新しい土地 (new lands) が西半球を南北に走っており、ヨーロッパとアジアの間の海洋の一大障害を形成していること、そして南北の本土は連続しており、単一の地理的実在であることを指摘するにいたった。

しかしながら、アメリカ発明の過程が完結するまでには、まだ紆余曲折が必要であった。例えば、一五〇七年ごろのルイシュの世界図〔資料⑫〕では、南の「もう一つの球」が描かれているのみであった。ここではまだ南北間の連続については懐疑的であった。そして一五〇二年ごろのカネイロ「カネリオ」の世界図〔資料⑬〕では、「大洋中の二つの島」として描かれており、ようやく陸球から漂流を開始するが、それが陸球と匹敵するほどの規模であることにについてはまだ懐疑的であった。

結局、一五〇七年の『宇宙誌入門』（サンディエ・アカデミー）により、新世界は、世界の第四の部分としてアメ

資料⑫ ルイシュの世界図（1508年） — オゴルマン図版Ⅶ —



新発見の南の土地を対蹠地のように描いている。

本稿では、Instituto Geográfico Nacional ed, *La Imagen del Mundo* (Madrid, 1992) 所収の図版を利用した。

資料⑬ カネイロ [カネリオ] 世界図 (1502年頃)
— 西暦版オゴルマン図版Ⅷ —



新発見の土地を二つの大きな島のように描いている

リカと命名されることになる。ここに、アメリカ発明の過程はほぼ完結する。しかし、アメリカは、ヨーロッパ・アジア・アフリカの「大陸」に対してまだ「島」とみなされ続けたのである。

Ⅳ アメリカの存在構造とアメリカ史の意味

この部分が、米国の大学における連続講演で新たに追加された部分の一つであるが、まず『宇宙誌入門』の意義が

いっそう簡潔に要約されている。つまり、従来島とみなされてきた「陸球」は大陸とみなされるようになり、一方海は反対に陸地に周囲を囲まれた「湖」とみなされるようになる。その結果、海は、政治面では法的領有の対象に加えられるようになった。そして従来陸球に限定されてきた「世界」は海をも一体化した水陸球全体を含むようになり、したがって「世界」は将来的には宇宙全体を含みこむことも可能となったのである。

また、不動とされてきた「地球」は「有翼の天体観測所」(地動説)と化し、有限とされてきた「宇宙」は無限とみなされるようになるとともに、人間の手で変更することもできるようになる。

「人間」についてみれば、もはや宇宙の囚人などではなく、反対にその所有者、支配者、主権者として自らを意識するようになる。

結局、アメリカの発明を契機としてヨーロッパ人は自己解放をとげていく。一種のイデオロギー革命がおきるのである。

そして、「異化」と「同化」という対概念を利用することにより、オゴルマンはアメリカの存在構造についての分

析をさらに深化させていく。つまり、同化の過程としては、アメリカの物理的存在が、第四の部分として世界のなかに同化されていった。この過程に際しては、「大陸(continent)」という概念が変化し、水面下の土地を介してアメリカもまたその他の大陸群と、つまりヨーロッパ・アジア・アフリカという旧大陸と「連続」(continue)している、とみなされるようになった。

しかし、同化の過程と同時に異化の過程として、アメリカの歴史的・精神的存在は「新」世界、新来者として異質のものともみなされ、もともとのアメリカの精神的存在はアメリカ自身から剝奪されてしまうことになる。

アメリカを発明したヨーロッパには、古典期以来、ヨーロッパ中心的な世界三分割の考え方が浸透してきており、ヨーロッパはアジアやアフリカよりも道義的に卓越していると考え、この考え方が中世のキリスト教的三分割へと継承されていった。そのため、ヨーロッパ史こそ宇宙史であり、ヨーロッパこそ歴史のパラダイムとなることができ、ヨーロッパ的生活方法こそ最高基準をなす、と自負されてきた。

その結果、ヨーロッパにより発明され、付与された、ア

メリカの歴史的・精神的存在としてのアメリカ史の意味とは、もう一つのヨーロッパとなること、つまりキリスト教的ヨーロッパ文化を受容することであった。アメリカがもう一つのヨーロッパとなるや、潜在的ヨーロッパと現実的ヨーロッパという二項対立は解消される。この点こそ、『宇宙誌入門』の新世界観がコロンブスやアメリカゴの二項対立的な新世界観と異なる点である、とオゴルマンは考えた。

しかしながら、もう一つのヨーロッパとなる道には模倣と独創の二つの道があった。模倣の道を選択したのが植民当初のスペイン系アメリカであり、ヨーロッパ・モデルにアメリカの環境を適合させようとした。その結果、例えば先住民をもキリスト教化し、同化しようとした。ただし、独立戦争や共和制時代を経ることによって、スペイン系アメリカの道もまた、今日では単なる模倣の道ではなくなつた、とオゴルマンも付け加えている。

一方、独創の道を選択したのがイギリス系アメリカであり、ヨーロッパ・モデルのほうをアメリカの環境に適合させようとした。その結果、先住民を同化するのではなく、放任ないし排除し、植民者はフロンティア開発に邁進して

いった。いわゆるターナー学説の考え方である。そうこうするうちにイギリス系アメリカは、発明者つまりヨーロッパのイメージにより発明されたが、いまや一つの新しい歴史的事実、いいかえるならば第二の新しいヨーロッパへと転化し、さらには、新世界・旧世界という区分ではなく、ヨーロッパ系アメリカ (Euro-America) という総合へと進みつつある、というのがオゴルマンの結論であった。

最後に、要約すれば、アメリカ発明の過程とは二つの部分からなる過程であり、第一のスペイン的部分により、物理的世界としてのアメリカは「宇宙の牢獄」概念から解放され（あるいはヨーロッパを解放し）、そして第二のイギリス的部分により、歴史的世界としてのアメリカはヨーロッパ中心の概念から解放されていく（あるいはヨーロッパを解放していく）のである。

(三) 新たな問いへ

オゴルマンは一四九二年の意味について問いを発しつつ、とうとう「アメリカの発明」という壮大な構想に到達した。一四九二年から五〇〇年目に当たる一九九二年が近

づき、「出会い」が共通テーマとして掲げられたとき、それに疑問を發したのもオゴルマンであった。

次に、オゴルマンが發しなかつた問いを、あえて發することにしよう。

第一に、同書でオゴルマンが分析したのは、単純化すれば、ヨーロッパ人の目に映つたアメリカのイメージであり、同書からはオゴルマンが主体としてのアメリカ先住民をどのように評価していたのかは、窺い知ることはできない。客体としてすら先住民の存在感は希薄である。では、アメリカ先住民の目に映つたヨーロッパのイメージはどうであつたのか。彼らによる「ヨーロッパの発明」はありえたのか。このような鏡像を通してみれば、ヨーロッパによる「アメリカの発明」の実像はどう描かれるであらうか。

第二に、「アメリカの発明」を契機としてヨーロッパは「宇宙の牢獄」という自己束縛的な概念から解放されるが、古典期以来のヨーロッパ中心主義的概念からは必ずしも解放されず、その結果、「アメリカ」を初めとする他世界はヨーロッパにより、植民地主義という、新たな「牢獄」に拘束されるようになったのではあるまいか。

以下、われわれに残された問いについて、近年の研究動

向を紹介していこう。

I 落合一泰「アメリカ」の発明¹⁷⁾

まず、われわれの第二の問いに関連して、オゴルマンが依拠したターナー学説、つまり一九世紀の世紀末にF・J・ターナーにより提起されたフロンティア理論は「自由は西部から」に集約されるようなアメリカ的民主主義を評価することにより、二〇世紀半ばを過ぎても歴史学会やアメリカの一般社会にあってもかなりの支持を得ていた。また、国民統合の点でも「ルツボ」に譬えられるような融合主義の典型例を提供してきた。しかしながら、アメリカにおけるニュー・レフト史学の台頭や黒人を中心とする少数民族集団による市民権運動の高揚とともにアメリカ的民主主義の裏面ないし暗部もまた指摘されるようになり、これを受けて日本においてもアメリカ史に潜む「帝国」性を指摘した富田虎男や清水知久や高橋章の著作を初めとして、近年では緻密な史料批判にもとづくアメリカ先住民史研究もまた盛んになってきている¹⁸⁾。

オゴルマンと同じ題名を持つこの落合論文は、「ヨーロッパにおけるその視覚イメージをめぐる」と副題にあるように、文化の持つさまざまな顔のうち「異文化のなかにイ

メージとして生きる文化」を、したがってヨーロッパ文化のなかのアメリカのイメージを、取り上げている。オゴルマンの問いかけを自ら引き受け、さらに一九世紀末までのアメリカのイメージを分析したこの論文によれば、中世末期のヨーロッパでは東方には無頭人や犬頭人のような怪異が跋扈していると信じられており、コロンブス以降も当初は「野蛮な未開人」というイメージが圧倒的だったが、やがて啓蒙主義の時代には「高貴な野生人」のイメージが、また一九世紀になると新古典主義の影響によりヨーロッパの古典文明つまりギリシャ・ローマ文明になぞらえる傾向も現われた。このように時代の変遷とともに移り変わったイメージの面もあれば、首尾一貫して変わらなかったイメージの面もあった。それは、ヨーロッパを男性や文化になぞらえ、他方アメリカを女性や自然になぞらえ[資料¹⁹⁾]、そして前者を優越視して疑わなかったヨーロッパ中心主義であった。アメリカという異文化との出会いにもかかわらず、中世末期の「東方の怪異」イメージを払拭できず、むしろそれを増幅するような形でアメリカ・イメージを「発明」してきたヨーロッパ中心主義を、視覚イメージの変遷の分析から確認している点で、非常に興味深い論考である。



この図から落合は、以下のような二項対立をヨーロッパとアメリカの間に読み取ろうとする。つまり、男性対女性、立ち姿対横臥、着衣対裸体、キリスト教対食人、科学技術対棍棒、文明対野生、文化対自然、優位対劣位。

出典：落合『『アメリカ』の発明』図12

Ⅱ 小林致広「神々を媒介とした出会い」⁽²⁰⁾

前掲の落合論文は、ヨーロッパが、その自己認識は別として（もちろん自己認識もまた他者認識と無関係ではありえないのだが）、一九世紀末になっても他者認識の点では中世末期の呪縛からは脱出できなかつたことを示唆している。第一の問いとも関連するが、このようなかけ違いがなぜ起こったのかを考える上で有益な視点を提供しているのが、この小林論文である。小林は、ヨーロッパによるインディオの「発見」は、同時にアメリカのインディオによる、より正確には（なぜなら「発見」まではインディオは存在しなかつたから）各民族集団による「白人の発見」でもあった、と指摘する。しかしながら、両者の「発見」は対等な二つの世界の「出会い」とはならず、つまり、副題には「インディオと侵略者の対話」とあるが、「他者のもつ他者性、そしてなにより個別性のなかで他者を把握」

し合うような対話に導くことなく、両者の一方的なモノローグに終わったというのが、小林論文の主張である。具体的には、インディオがカリベと呼ぶ人々をコロンプスは犬面をした食人種のカニバ、さらにマルコ・ポーロが仕えた大汗王の部下、と解釈した。一方、メキシコ湾岸へのスペイン人到来の報に接したアステカつまりメシーカの王モクテスマ二世は、白い異人の姿を古絵文書のなかに、トナカマサトルという「人体のついた鹿」のなかに、発見したことにより、異邦人としてではなく神々と解釈し、待遇しようとした。このようにモノローグに終始する両者の「出会い」は、結局「一方による他方の抑圧」、つまり征服に終わらざるをえず、神々の「出会い」であるはずのキリスト教化もまた「魂の征服」とならざるをえなかった。

Ⅲ 染田秀藤「発見と征服」のイデオロギー²¹⁾

コロンプスだけではなく、インディオの側も先験的観念に囚われていたことが分かったが、征服者や植民者は、さまざま自らの行為を正当化する必要に迫られた。染田論文はこの征服のイデオログたちについて、学識者のビトリアやセプールベダ、『新大陸自然文化史』の著者サアゲンを例にあげて説明するとともに、航海者のコロンプスやア

メリゴによるカリベ「食人種」の報告が著述家のピエトロ・マルティーレやオビエドによって「食人種」のレッテルが反抗的なインディオやインディオ全体にまで適用され、それがスペイン人による植民地支配を正当化する根拠をセプールベダらに与えたことを指摘している。

また、小林は別論文「インディオという標徴」²²⁾において、スペイン人らは自らの侵略行為を正当化するために「理性を欠く」インディオ像を五〇〇年前に「発明」した、と指摘している。そして、理性の欠落の証拠とされたのが、近親相姦などの性的行為や、人身供犠、食人であったが、アステカ食人国家論や大規模な人身供犠はスペイン人らにより捏造されたものであることを、絵文書の分析などから明らかにしている。

なお、染田は、このようなスペイン人の自己中心的なインディオ認識に対して、他でもないオビエドの伝えるエピソードを紹介することにより、インディオの側のスペイン人認識の変化を示唆している。つまり、現プエルトリコのサンフアン島のインディオたちは一計を案じて、キリスト教徒たちが不死ではないことを知ると、彼らに対して反乱するようになった、というエピソードを紹介している。こ

ここでは、スペイン人とインディオのどちらの他者認識がより多くの科学的合理性を備えているか、と問われているのであろう。こういう問い方ももちろん成立するが、小林のようにシンクレティズムを「征服した神も、実は被征服者の神々に征服・教化されていった」というように捉え返すことも、また「征服の踊り」の中にインディオの抵抗の姿を読み取ることも、重要であらう。

IV 清水透「コロンブスと近代」²⁴

最後に取り上げたいのが、この清水論文である。「アメリカの発明」を契機としてヨーロッパ人は世界ないし宇宙を有限なものではなく無限なものとなすようになったとするオゴルマンに対して（このような宇宙観が変化するのは一九六八年のローマ・クラブの結成以降だろうか）、清水は逆にコロンブスのアメリカ大陸の「発見」によって世界は無限から有限へと転換したと指摘している。清水によれば、中世ヨーロッパの人々は、民衆だけでなくエリートも含め、平板な大地の彼方に奈落を想定していたため、限界点としての奈落よりもむしろ、奈落までの間に野蛮の無限の広がりを感じることができた。ところが、地球が球体であることが実証され、奈落の不在が証明されるや、地球

世界は有限となり、ヨーロッパ文明と非ヨーロッパ野蛮が直接向き合うこととなった。いいかえるならば、オゴルマンがヨーロッパの宇宙観・世界観を考察するために「アメリカ」を取り上げたのに対して、清水は「アメリカ」を契機としてヨーロッパと非ヨーロッパ、あるいは自己と他者との関係性そのものを考察しようとしたのである。関係性を考察の軸とするとき、まずヨーロッパによるアメリカ先住民の「他者化」（清水のキー・タームの一つ）・差別化の過程がある。つまり、スペイン人らは彼らに敗者・未開・野蛮という表象を付与することによって、「インディオ」を創造したが、キリスト教化つまり文明化が可能な「野蛮」と判断したために、そこに寄生しようとした。しかし、その寄生は一方における混血化と他方におけるインディオや黒人奴隷の逃亡という新たな「野蛮」を生み、スペイン人ら「文明」の側にとり脅威となった。これを教訓にした後発の植民地帝国は、文明化の不可能な「自然」とみなすようになり、非ヨーロッパ野蛮自然である先住民の徹底的なクリアランス「清掃」へと進むのであった。オゴルマンが「同化」と「異化」と呼んだ現象は清水によりこのように解釈し直された。そして、次なる過程として、他者

化・差別化の対象は非ヨーロッパにとどまらず、ヨーロッパ内部でも「内なる他者と内なる野蠻」探しが「国民的」という基準のもとに進められることによってヨーロッパ近代が成立したこと、そしてそれは自己解放的なものではけつしてなく、自ら創造した「野蠻」に包囲された「文明」の自己閉塞的な姿であることを指摘するとき、清水はヨーロッパ史そのものの見直しの必要性を示唆しているのである。

最後に、これまで近年の研究動向を見てきたが、これらの研究に共通するキー・タームが、「発明」「創造」と訳される例もある）である。今日急接近しつつある歴史学と文化人類学とを結びつける方法論あるいはキー・タームが「発明」であることを再確認するとき、この概念を一九六〇年代初にいち早く規定し、適用したオゴルマンの貢献の大きさを感ぜずにはおれない。

【追記】

本稿は、一九九四年一月二七日に国立民族学博物館において共同研究「ラテン・アメリカの文明像に関する学際的研究」の一環として筆者が行なった研究報告「オゴルマン

の「アメリカの発明」をめぐる」、ならびに一九九五年六月二五日の関西アメリカ史研究会月例会における報告を基礎にしている。なお、一九九四年二月発行の「資料ラテンアメリカ」第二九号では「オゴルマン「アメリカの発明」を読む」と題して紹介したことがあったが、一九九五年度の奈良大学における歴史学通論Ⅱではこの論題を学生諸君と一緒に考え直し、本稿のように発展させる好い機会に恵まれた。また、筆者は同書をすでに試訳し、「アメリカは発明された——イメージとしての「一九九二年——」という題のもと、ラテンアメリカ資料センター『資料ラテンアメリカ』第二二号（一九九三年二月）、第二三三号（一九九三年八月）、第二五号（一九九三年一〇月）、第二七号（一九九四年一月）に掲載した。誤訳や不適切な訳が残っているので、近い将来発行し直したい、と思っている。

注

- (1) Edmundo O'Gorman, *The Invention of America: An inquiry into the historical nature of the New World and the meaning of its history*, Bloomington, 1961. 同書の序文にあるように、「オゴルマンはこれをテーマに何度も問い直してきた。

Fundamentos de la historia de América (1942). Crisis y pomeñir de la ciencia histórica (1947). La idea del descubrimiento de América. Historia de esa interpretación y crítica de sus fundamentos (1951).

- (2) Do. La invención de América: investigación acerca de la estructura histórica del nuevo mundo y del sentido de su devenir, México, 1977. スペイン語版の初版は一九五八年であるが、インディアナ大学出版局の英語版のスペイン語訳は「」の第二版からである。

- (3) Ernesto de la Torre, "Semblanza del Doctor Edmundo O'Gorman", en: UNAM, *Colm en la Biblioteca Nacional de México: Homenaje a Edmundo O'Gorman*, 1990.

- (4) Gonzalo Fernández de Oviedo y Valdes, *Sumario de la natural historia de las Indias*, Toledo, 1526 y *Historia general y natural de las Indias, islas y Tierra-Firme del mar Oceano*, Sevilla, 1535. オビエド、染田秀藤・篠原愛人抄訳『カリブ海植民者の眼差し』(アンソロジー「新世界の挑戦」)四) 岩波書店、一九九四年。「オビエドは『周知のとおり』、コロンブスが一九九二年の航海でインディアス(つまりアメリカ)を発見した」と言明している。(「オゴルマン」『資料ラテンアメリカ』二二号、七ページ)

- (5) Martín Fernández de Navarrete, *Colección de los viajes y descubrimientos que hicieron por mar los españoles desde fines del Siglo XV, con varios documentos inéditos concernientes a la*

historia de la Marina Castellana y de los establecimientos españoles en Indias, Madrid, 1825-37. 「これは……コロンブスがアジアに到達する計画だったことだけでなく、それを成し遂げたという信念から脱却しえなかつたことを暴露する効果を上げた。」(「オゴルマン」前掲、一五ページ)

- (6) Bartolomé de las Casas, *Historia de las Indias*, 1527-60. 長南実訳『インディアス史』全五巻(大航海時代叢書Ⅱ)岩波書店、一九八一―九二年。「アメリカの発見は、その目的のために選ばれた人間によって遂行された、神の計画の実現として現われる。」「本質的なのは……福音の光をまだ享受していない人間の住む土地が出現したということである。」(「オゴルマン」前掲、一ページ)

- (7) Alexander von Humboldt, *Kosmos. Entwurf einer physischen weltbeschreibung*, 1845-62. 「地球の未知の部分が、人類の利益の真の代表である科学者たちに対して観察フィールドとして与えられた。」「コロンブスが熱帯の自然の美に対して感受性豊かだった。」(「オゴルマン」前掲、一九ページ)

- (8) Samuel Eliot Morison, *Admiral of the Ocean Sea. A Life of Christopher Columbus*, Boston, 1942. 一般読者向けに編集し直された版が翻訳刊行されている。荒このみ訳『大航海者コロンブス』原書房、一九九二年。「彼『コロンブス』はまったく偶然、幸運にもアメリカを発見した。」(「オゴルマン」前掲、二二ページ)

- (9) モリソン「新世界が征服者のカステイリヤ人に恩寵豊かに

- その処女性を差し出した二四九二年一〇月の日々ほどの喜び・不思議・驚きを、死すべき人間は再び獲得することはないのであろう。」(オゴルマン、前掲、二八ページ)
- (10) イシドルス(五六〇頃―六三六年)はスペインのセビーリヤの大司教で、古代ギリシャ・ローマ文化を中世ヨーロッパに伝えようとした。
- (11) コロンブス関係資料は、青木康征『完訳コロンブス航海誌』(平凡社、一九九三年)に詳しく紹介されている。クネーオの書簡も訳されている。
- (12) アメリゴ関係資料は、コロンブス関係資料とともに、林屋永吉訳『コロンブス、アメリゴ、ガマ、バルボア、マゼラン航海の記録』(大航海時代叢書I、岩波書店、一九六五年)に訳されている。
- (13) Pedro Martir, *Décadas del Nuevo Mundo*, Alcalá de Henares, 1550 (in Latin). 清水憲男抄訳『新世界とウマニスタ』(アソロジー新世界の挑戦) 岩波書店、一九九三年。
- (14) ファン・デ・ラ・コーサ(一四六〇頃―一五〇年)はスペインの航海者で地図製作者。コロンブスの第二回航海に同行、その後数度にわたりアメリカに渡航したが、最期は先住民に殺害された。
- (15) ヨハネス・ルイシユはフランドルの地図製作者。
- (16) ニコロ・デ・カネイロ「カネイロ」はジェノヴァの地図製作者。
- (17) 落合一泰「アメリカ」の発明——ヨーロッパにおけるその視覚イメージをめぐって——『ラテンアメリカ研究年報』第一三号、一九九三年。
- (18) 清水知久・富田虎男・高橋章『アメリカ史研究入門』山川出版社、一九七四年。最近の研究の例は、嶋月裕典の『合衆国のインディアン政策の展開とインディアン』(『南北アメリカの五〇〇年』第三巻、青木書店、一九九三年)ほか、一連の仕事がある。
- (19) その他に「現実に生きられている文化」「外部に向けた自画像」などの顔があり、後者を分析した例が、落合「文化間性差、先住民文明、ディスタルクシオン——近代メキシコにおける文化的自画像の生産と消費——」『民族学研究』六一巻一号(一九九六年)である。
- (20) 小林致広「神々を媒介とした出会い——インディオと侵略者の対話——」『歴史評論』第四八一号、一九九〇年。
- (21) 染田秀藤「発見と征服」のイデオロギー——五〇〇年の時を超えて——『歴史評論』第五〇一号、一九九二年。
- (22) 石原保徳は、「大西洋人」五人、つまりオピエド、シエサ、ドゥラン、サアケン、アコスタを論じている。石原保徳「新世界」の挑戦——ヨーロッパ発見にむかって——『歴史学研究』第五九五号、一九八九年。
- (23) 小林致広「インディオという標徴」同編『メソアメリカ世界』世界思想社、一九九五年。
- (24) 清水透「コロンブスと近代」歴史学研究会編『講座世界史一 世界史とは何か』東京大学出版会。

(25) 例えば、R・バルトラは「野蛮の発明」と題して、野蛮の歴史を古代ギリシヤにまで遡って考察している。大久保教宏訳「野蛮なる西洋の発見——ある想像上の原始集団の歴史——」『季刊 *ichiko*』二二二号（一九九二年）。Roger Bartra, *El Salvaie en el espejo*, Mexico, 1992.